

画像の知覚と描写内容

清塚 邦彦 (KIYOZUKA Kunihiro)

山形大学

本報告では、心の哲学と美学の間に位置する問題として画像表象の問題を取り上げる。画像表象の問題とは、画像が何かの画像として一定の描写内容を持つということをどう理解するかの問題である。

この問題が分析哲学者の関心を集めるようになったのは美術史家ゴンブリッチの著書『芸術と幻影』(1961年)の発表以後であるが、当のゴンブリッチの議論も含め、行われた論議の大きな部分は、絵を見る知覚経験をどう理解するかという点に向けられてきた。その背景には、絵の理解が、他の種類の表象、例えば言葉を理解する場合に比べて、表象それ自体に向けられた視知覚の働きに特別に大きく依存する、という共通理解があったと思われる。また、もう一つの共通理解として挙げておきたいのは、絵を見る経験が「二面性」とでも呼ぶべき性格を持つというウォルハイム由来の考え方である。二面性とは、ここでの大雑把な理解では、絵を見る経験が、線描や彩色を施された平らな表面を見る経験であると同時に、平らな表面とは異なる多様な人物や事物や風景を見る経験でもあるという二つの面を持つということである。しかし、もちろん、ここにいう二つの「面」のそれぞれが正確にどんな働きを指し、互いにどのように関係するのか、またそれらが絵の描写内容の特定にどのように貢献するのかといった一連の問いについては、論者たちの説明は大きく分岐する。大雑把な見出しだけを並べれば、ゴンブリッチの幻影説、ウォルハイムの知覚説、グッドマンの記号説、ピーコックらの類似説、シアーらの認知説、ウォルトンのメイクビリーブ説など。もちろん、それぞれにはさらに幾つものバリエーションがあり、幾つかを取り混ぜた混合説もある。今日一般に「描写」の理論と呼ばれるのは、これら一連の議論が織りなす言説空間である。

これらの論議を扱うのにどこから手を付けるかについては関心に応じて色々な選択がありうる。さしあたり今回は、絵のもとに見て取れる内容が絵の描写内容の特定に貢献する仕方に関わるややマイナーな論議に注目してみたい。その論議の発端は、我々が絵のもとに見る様々な事物の姿が、必ずしもその絵の描写内容には属さないと思われるという観察である。と言っても、まだ話が漠然としているので、二、三の例を考えてみよう。

(1) 美術館で見た人物画を見ながら、そこに自分の友人の姿を見て驚くような場合、その絵のもとには確かに友人の姿が「見える」けれども、だからその絵がその友人を描いていると決めつけることはできない。他人の空似かもしれない。

(2) 人を撮った白黒写真には白黒の人の姿が見えるけれども、そこに白黒の人が描かれていると言うのは普通は間違いであろう。(白黒写真は明暗の階調は描いていても、白黒も含めた色は描いていないと思われる。)

(3) セザンヌの有名な『大水浴』の画面に見ることができる人物たちの姿はグロテスクであり、人間の標準的な解剖学に照らせば奇形的とも言えるが、しかし、セザンヌの絵は奇形の人々を描いた絵とは考えられていない。

これらの互いに異質な事例に共通しているのは、絵のもとに見える内容が、一般に絵の描写内容と解されているものとは食い違うという点である。この種の食い違いの事例は二重の問題を提起しているように思われる。一つは、両者がいかに区別されるかという区別の基準の問題である。もう一つは、逆に、両者がどう連携するか(とりわけ、(2)や(3)の事例で、描写内容とは区別される《見える内容》が、描写内容にどう貢献するか)という問題である。本報告では、これら二重の問題について、関連する最近の論議の検討をつうじて解明を試みる。